ダヤン・ハガンの年代（上）

岡田英弘

（一）従来の研究

清代内蒙古の四十九旗の内、半に近い二十三旗は皆チンギス・ハガン（Činggis qaγan）の十五世の孫達延車臣汗（Dayan čečen qaγan）の裔と称せられ、[1] 外蒙古八十六旗に至つては厄魯特（Öγeled）三旗を除き悉く達延汗を祖とする。[2] 而してチンギス・ハガンの血を承けた王公にしてダヤン・ハガン以外の家系に属するものは全くない。蒙古史上かく重要なる地位を占めるダヤン・ハガンの行実については清代撰述の多くの蒙文年代記類にかなり詳細な記録があるにも拘らず、それ等が主として紀年の点で幾分の誤謬を含む故に記事の内容まで疑問視せられる傾向がある。このことは、偶々同時代の明の文献にこのハガンの事を伝へたものの少いことと相俟つて、元来シナ学的伝統に育てられた日本の学界の態度は、蒙古文献の伝承を頭から否定してかかり、却つて風聞や臆測に基く部分の多い明人の所説を、それが単に漢字で書かれてゐるからとの理由で無批判に鵜呑みにする傾向が強かつた。しかし如何に同時代の記録だとて、それが境外の異民族に関する場合には誤つた情報が紛れ込む率は甚だ高いことは言ふまでもない。このことは明史日本伝を一読すれば直ちに知られることである。幸ひにして日本には確実な史料

1

が多く伝はつてゐるからいいが、若し明史が同時代の日本に関する唯一の史料であつたとすれば、シナ学的な研究態度が如何に誤つた結論に人を導いたか、思ひ半に過ぎるものがあらう。同じことは明代の蒙古に関する漢文史料についても言へるはずであつて、殊に従来の研究者が一致して認めてゐる通り、ダヤン・ハガンの時代には明と蒙古との間にはあまり接触が多くはなく、従つて明人が蒙古の内情に関心を持つことも少かつたことを忘れてはならない。これに反して万暦の朝鮮をめぐる日明の衝突は比較にならぬ程の重大な事件であつて、この結果日本に関する明人の専著も多く現れたが、尚且つ秀吉の姓すら正しく伝はつてゐないことは注目してよい。即ち我々は明代の蒙古史を研究するに際し、漢文の史料はこの程度の信憑性しか持たぬものとして扱はねばならぬのである。

かく考へて来れば、当然起るべき問は、それでは明史料に代つて根本とさるべき蒙文史料はどれ程信じ得るかと云ふことにならう。然し幸にして現在利用し得る蒙文史料はかなりの種類に上り、それぞれ独自の伝承を含むので、これ等を比較分析することによつて、清代撰述の年代記類の原拠となつた明代の史料の内容をある程度復原出来るし、それ等の伝承を無視したり故意に歪曲したりしないで適当な解釈を加へて漢文史料中の信ずべきものと比較すれば、蒙文史料の最大の弱点である紀年上の混乱を解決し、従来不明であつた事実も明らかにし得るのである。この論文ではかうした作業を行つて先づ蒙文年代記に拠つてダヤン・ハガンの事蹟を明かにし、次いで明人の記す所の中から正確と認められるものを拾ひ出して蒙文史料の補強に資したいと思ふ。がその前に、従来のこの問題に関する我が国人の業績を瞥見して見たい。

管見によれば日本で始めてダヤン・ハガンに論及したのは原田淑人先生であるらしい。「明代の蒙古」と題する

論文は東亜同文会報告の明治四十一二年の諸号に渉つて連載されたが、その第八章「歹顔汗の蒙古統一」は明治四十二年二月発行の第百十一回に十頁を占めてゐる。大旨を紹介すると、先づこの頃利用し得る殆ど唯一の蒙文史料であつた蒙古源流（Erdeni-yin tobči）の所伝を略記し、バト・モンケ（Batu möngke）が成化六年（1470）に即位してダヤン・ハガンと号したと云ふのを、前代の可汗満都魯の死がそれより後であるから謬とする。即ち明憲宗実録巻一九二、成化十五年七月庚辰の条に

朶顔・福餘・泰寧三衛虜酋各奏報、迤北満都魯・乩加思蘭已死。且請従便途入貢、并求開市……。

とあるからで、バト・モンケの即位をそれより後とし、続いて同書巻二八八、成化二十三年三月癸卯の条に

巡撫遼東都御史劉潺等奏、卜蘭罕衛與泰寧衛夷人傳報、小王子已死。且言、欲従喜峯口入貢、因與泰寧衛同於馬市交易……。

とある事からこの頃可汗の交代があつたものと見、これ以前の可汗の名は明実録に見えないことを指摘し、新可汗については明孝宗実録巻一四、弘治元年五月乙酉の条に

先是、北虜小王子率部落、潜住大同近邊、営亘三十餘里、勢将入寇。至是、奉番書求貢、書辭悖慢、自稱大元大可汗、且期六月十五日、齎聖旨来。守臣以聞……。

とあり、又同書巻一八、弘治元年九月乙丑の条に

迤北伯顔猛可王遣使桶哈等來貢。其使自一等至四等者凡十九人。阿児脱歹王、及脱脱孛邏進王、及知院脱羅干・阿里麻・伯牙思忽・那孩所遣使臣自二等至四等者凡三十五人。初稱大元可汗、奏乞大臣報使、以通和好。

不許。既又比例乞陞職。許之……。

とあるのに拠つて伯顔猛可王と看做す。そして成化年間の可汗については、葉向高の四夷考下、北虜考に成化十八年の条下に

是時滿魯都已衰弱、不知所終。其入寇者復稱小王子、或稱把禿猛可王、即故小王子後也……。二十三年……小王子死、弟伯顔猛可代為小王子。弘治元年夏、小王子奉書求貢、詞稍慢、自稱大元大可汗……。

とあり、又鄭曉の吾学編六八、皇明四夷考巻下、韃靼に

滿都魯衰而把禿猛可王・太師亦思馬因・知院羅千強盛。弘治初把禿猛可死、弟伯顔猛可立為王。當是時、瓦剌與伯顔猛可皆遣人入貢……。

同書六九、皇明北虜考にも

未幾滿魯都衰弱、不知所終。而把禿猛可王・太師亦思馬因・知院脱羅千屢遣人貢馬。弘治初、把禿猛可死。阿歹立其弟伯顔猛可為王……。

とあるのに拠つて把禿猛可王と考へ、これが蒙古史料の伝へるダヤン・ハガンの本名バト・モンケと一致することを指摘しながら、蒙古史料にはバト・モンケ・ダヤン・ハガンが嘉靖年間まで在位したとあることの矛盾に逢着して、結局、「要するに明の記録にては弘治年間の小王子の世系を審かにすること能はず、蓋し世系の不明なる所以は、可汗か何れも小王子の称によりて明人に呼ばれたればなり、」として判断を避けてゐる。更に蒙古源流にはダヤン・ハガンが嘉靖二十二年に歿したとあるが、これに対しても、皇明北虜考の

正德間、小王子三子。長阿爾倫、次阿著、次滿官嗔。太師亦不剌弑阿爾倫、遯入河西。西海之有虜、自亦不剌始也。阿爾倫二子、長卜赤、次乜明、皆幼。阿著稱小王子、未幾死。衆立卜赤、稱亦克罕……。

とあるのに従つて、「卜赤汗の位に即きしは正德の末か、若くは嘉靖の初と思はれ、少くも嘉靖十年以後は卜赤の子打来孫の治世なれば、達延汗の死せしは恐く正德の末ならむ。」と訂正してゐる。そしてダヤン・ハガンの事業としては、右翼三万戸の収服と諸子の分封を挙げ、これまで権臣政を専にし、可汗は只空位に具はるのみであつたが、成化の末葉より可汗の権威漸く振ひ、号令復漠中に行はるるに至つたのであると結論してゐる。

この論旨を更に徹底せしめたのが故和田清先生であつた。大正四年四月の先生の卒業論文は「清初の蒙古経略」であつたが、これに訂正増補を加へたのが大正六年六月発行の奉公叢書第五編、「内蒙古諸部落の起源」である。内容は三編に分たれ、第一編「年代雑考」の含む二章の内第一章は「達延汗に就いて」と題され、「達延汗以前の汗位」・「達延汗の年代」・「達延汗の系譜」・「達延汗の事業」の四節、五二頁に渉つてこの問題を論じたものである。和田先生の所論も蒙古源流の伝へるダヤン・ハガンの年代の批判から出発するもので、原田説に従つて、成化六年の即位を謬りとし、更に満都魯可汗の次代の小王子の名が初めて現はれたのが成化十七年五月であることを指摘してゐる。これは明憲宗実録巻二一五、成化十七年五月己亥の条に

命太監汪直、監督軍務。威寧伯王越佩平胡将軍印、充総兵官、率兵三千、赴宣府、調度擊賊。時宣府総兵官周玉等馳奏、是月二十九日、緣邊有警。参将呉儼等追虜、出獨石山泉墩南、尋調騎兵策應。比暮不還。上已命直・越、将兵往擊。未發而虜中逸歸者傳報、虜酋亦思馬因等竊議與小王子連兵、欲寇大同等邊……。

とあるのを指す。また嘉靖二十二年の死歿に就いても、原田説から一歩を進めて、嘉靖初年には既に小王子の威令が套虜に行はれず、ダヤン・ハガンの孫なる吉囊（Jünong）の活躍時代に入つてゐたことからして、正しい死歿年代を嘉靖二三年の頃としてゐる。即ち明世宗実録巻九一、嘉靖七年八月癸丑の条の

提督三邊軍務尚書王瓊疏言、虜賊久駐偏頭関外。又套虜萬餘騎従賀蘭山後、踏氷過河、駐莊浪。探之俱不得其故。近據走回軍人王毛娃子稱、小王子欲駆套虜東渡、撃黄毛達子、而套虜不即去。又調取西海達子、而西海不肯従。乃知前賊駐偏頭・莊浪之故……。

と、同書巻一九五、嘉靖十五年十二月丁未の条の

巡撫甘粛右僉都御史趙載條陳邊事。一言、套虜吉囊屢犯邊境、且有並呑小王子之心、其為邊患不細。固内防外、策宜預講。乞勅兵部、會議戦守防禦之略……。

とに拠るのである。そしてこれを精説しては同書巻七八、嘉靖六年八月庚戌の条に

套虜数萬騎踏氷過河、聲言大入。提督尚書王憲督総兵鄭卿・杭雄・趙瑛等、分據要害、屯兵以禦之、命都指揮卜雲、伏兵先斷其帰路。無何虜従石舊墩入。卿等與戦敗之。虜退走、至青羊嶺。雲等伏發、又大敗之。凡斬首三百餘級、獲胡馬器械無算。捷聞……。

とある入寇を、明史巻一七四、杭雄伝に

吉囊大入。総督王憲檄雄等破之。進都督同知。

同書巻一九九、王憲伝に

吉囊数萬騎渡河、従石臼墩深入。憲督総兵官鄭卿・杭雄・趙瑛等、分據要害擊之。都指揮卜雲斷其歸路。寇至青羊嶺、大敗去。五日四捷、斬首三百餘級、獲馬駞器仗無算。帝大喜……。

とあるのに拠つて吉囊の所為と定め、ダヤン・ハガンの死をそれ以前と結論し、また既に引いた皇明北虜考の「阿著稱小王子、未幾死」によつてダヤン・ハガンの死後吉囊の父阿著が暫く小王子を僭称した時期を想定し、それ以前の嘉靖初にダヤン・ハガンの卒年を置いたのである。但し和田先生も認められる如く、明実録に実際に吉囊の名が現れるのはもつと晩れて嘉靖十二年の事で、明世宗実録巻一四七、同年二月癸卯の条に

先是、小王子部落卜兒孩因内變逃據西海、為莊寧邊患、且二十年。已懼小王子讐己、請納款於我朝廷。下守臣、勘上方略。無何、虜酋吉囊等擁十餘萬衆、屯套内、窺犯延綏花馬池、以入涼。固屬各邊戒厳、不得間。乃突出四五萬騎、亂河西濟、襲卜兒孩、大破之。至是、総制尚書唐龍及甘粛鎮巡官以状上……。

とあるのがその初見であることは注意してよい。

かくダヤン・ハガンの治世を成化十五六年以降嘉靖二三年に至る約四十年間に限つておいて、和田先生は原田説に触れられた成化二十三年の小王子の死を取り上げ、皇明北虜考の外に、四夷考と殆んど全く同文の何喬遠の名山蔵王享記四、韃靼の文を引いてこの年把禿猛可（Batu möngke）歿して弟伯顔猛可（Bayan möngke）が嗣いで可汗と為つたと断ぜられ、傍証として漢訳蒙古源流巻五の「歳次戊子、博勒呼濟農年二十九歳時、生巴延蒙克」を挙げて巴図蒙克には巴延蒙克といふ弟があつたとされた。但しこの最後の一事は問題があり、成程漢訳本の基いた満文本には suwayan singgeri aniya bolhū jinung orin uyun se de bayan mungke be banjiha. とあるけれども、(3)

蒙文の諸本ではこれに当る所がいづれも teddii bayan möngke bolqu jinong qorin yisün-iyen uu qulγuna jil-eče γurban od bolγad: 即ち「さてバヤン・モンケ・ボルフ親王(ジノン)は、その二十九歳の戊子の年から三年経つて」となつてゐて、(4) 満文本の誤訳に過ぎぬことは論議の余地がない。従つてこの一条はバト・モンケの弟にバヤン・モンケがあつた証とはならないのである。(5)

いづれにせよ和田先生はかく成化・弘治・正徳に渉る蒙古の汗位をバト・モンケ、バヤン・モンケ兄弟に二分し、兄弟偕にダヤン・ハガンと号したために蒙古源流がこれを混同して一人としたものと想像し、北元中興の英主としてのダヤン・ハガンの功業を挙げて弟バヤン・モンケに附し、更に兄バト・モンケは遺児無くして夭折し、伝へられるダヤン・ハガンの十一子は悉く弟の子であると考へてをられる。次にダヤン・ハガンの事業については、亦思馬因征伐は成化の末年兄の手によつて行はれ、瓦剌 (Oyirad) 撃攘は兄の時に始まり弟の治世に顕著になり、土黙特 (Tümed) 併合、右翼征伐、兀良哈征伐は皆弟の事業とされる。而して弟ダヤン・ハガンの事功を総評して、その用兵は概して東方より西方に向つて行はれ、主として異部族を掃蕩して純粋蒙古の勢力を樹立し、其の長ずる所は部内統一の鞏固にあり、可汗畢生の事業とは其の勢力圏内の異分子の芟除にあり、内蒙古の全部と併せて外蒙古の東偏一部を籠蓋したその境域に諸子を分封したのであると結ばれる。

「内蒙古諸部落の起源」一たび出でてそのダヤン・ハガンに関する所論は殆んど定説となつた観があつたが、やがて蒙古源流以外の蒙文史料が次々に現はれて来ると、和田先生は先の説に自ら疑ひを懐かれるやうになつたと見える。先生は昭和十七年四月二十二日、東京帝国大学の山上会議所で開かれた東洋史談話会で「蒙古の達延汗に就

いて」と題して講演されたが、その要旨を神田信夫氏が筆録したものが史学雑誌第五三編第六号に載つてゐて、先生の説の変化の跡を窺ふことが出来る。先づダヤン・ハガンの即位の年については、前著では成化十五六年の頃となつてゐたのを、略本アルタン・トブチ（Quriyangγui altan tobči）の「亥の年」に基いて成化十五年己亥、満都魯の死去の年に相違ないとし、また死歿の年代については、やはりアルタン・トブチにダヤン・ハガンの死後その三男バルス・ボロト（Bars Bolod）が一時汗位を簒奪したことが見えてこれが明人の伝へる阿著が一時小王子と称した事と一致する所から見て、蒙古源流の伝へるバルス・ボロトの卒年嘉靖十年以前、恐らく嘉靖五六年頃とする。次に把禿猛可、伯顔猛可の問題に触れ、漢訳本蒙古源流に巴図蒙克に弟巴延蒙克があつた如く書かれてゐるのが間違ひであることを認め、源流には達延汗を巴図蒙克一人とし、アルタン・トブチにも明の張鳴鶴の登壇必究巻二三、北虜各支宗派によつてもダヤン・ハガンは一人となつてゐるし、又蒙古の王公が自らバト・モンケ・ダヤン・ハガンの子孫と称してゐることを指摘し、ダヤン・ハガンはやはり一人であると論じてゐる。そして明実録の伝へる成化二十三年の「小王子已死」は遠く東蒙古の方面から伝報せられたので確実ではなく、実は同年ダヤン・ハガンが亦思馬因を討ち倒したのを誤伝したのであると考へ、翌弘治元年に大元大可汗と号して明に書を送つたのは把禿猛可で、亦思馬因が亡びて実権を握つたためにこの称号を用ひ始めたので、これが伯顔猛可王の所為であつたとは実録の編者の誤解であり、バト・モンケ・ダヤン・ハガンはずつと在位してゐたのであるとする。そして成化二十三年の小王子の死を誤りとする見解をとるものとして明史巻三二七、韃靼伝を挙げてゐる。今その文を引用すれば、

敵去、輙復来、迄成化末、無寧歳。亦思馬因死。入寇者復稱小王子。又有伯顔猛可王。弘治元年夏、小王子奉書求貢、自稱大元大可汗。朝廷方務優容、許之。自是與伯顔猛可王等屢入貢。漸往来套中、出没為寇。

とあつて、小王子と伯顔猛可王とを別人とし、且つ成化二十三年の小王子の死を認めてゐない。

かく和田先生が自説を変更せられたのは、蒙古源流以外の蒙文史料、ここでは略本アルタン・トブチを見るに及ばれたからであることは、今紹介したその論旨によく表はれてゐるが、更に多くの蒙古文献が利用出来るやうになると、和田先生はその新説を益々補強され、昭和三十三年十月、国際基督教大学アジア文化研究論叢第一輯に「達延汗について」と題する論文を発表された。これは相当補訂を加へられて翌三十四年三月発行の「東亜史研究（蒙古篇）」に収められ、更にその前半は英訳されて "A Study of Dayan Khan" と題して Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 19 (1960) にも載つてゐる。今定稿と称すべき「東亜史研究」所収のものに拠つて内容を紹介しよう。

先づ和田先生は、蒙古源流の伝へるダヤン・ハガンの年代の批判から出発される。今度はマンドグルン・ハガン (Manduγulun qaγan) が天順七年癸未に即位して成化三年丁亥に歿したとあるのを、明実録ではこれに当る満都魯が可汗と為つたことは成化十一年十月己卯の条に出で、その死は同十五年七月庚辰の条に見えることから推して、それぞれ成化十一年乙未即位、十五年己亥死去の誤りであると論じ、十二支だけで記してあつた蒙古史料を源流の著者が誤解して十二年早い年代を当てたものなることを証せられた。そしてこの紀年のずれをダヤン・ハガンの即位の年に適用して、その成化六年庚寅とは実は十二年後の成化十八年壬寅の事であるとし、時に七歳であつた

といふのも誤りであるが、天順八年甲申に生れたといふのは子孫の年代から見て恐らく正しく、実は十九歳になつてゐたものとされる。そして源流の伝へる死去の年嘉靖二十二年癸卯については、前説の通り遅すぎるとし、その生前に死んだという長子トロ・ボロト（Törö bolod）の卒年が嘉靖二年癸未、死後に簒立したと伝へられる三子バルス・ボロトの卒年が嘉靖十年辛卯と源流にある所から、ダヤン・ハガンの殂落はこの間にあつたかとされる。ところがハガンの晩年にウリヤンハン（Uriyangqan）万戸が叛して討滅されたことがあり、この戦には右翼三万戸の衆も参加したのであるが、これについて漢訳蒙古源流巻六に「達延汗率察哈爾・喀爾喀兩部落之兵、往征之。並致信於巴爾斯博羅特濟農之子、帶右翼三萬人、前来攻入。」とあり、これが蘇志皐の訳語に

蒙古一部落最樸野、無書契、無文飾、無誕妄。（如云不攻某堡、信然。）近亦狡詐甚矣。聞、小王子集把都児台吉・納林台吉・成台吉・血剌台吉（部下着黄皮襖、為號。）・莽晦・俺探・巳寧諸酋首兵、搶西北兀良哈、殺傷殆盡。乃以結親紿其餘、至則悉分於各部、啖以酒肉、醉飽後皆掩殺之。此其一事也。

とある兀良哈征伐と一致するとして、(6) 嘉靖十年のバルス・ボロトの死後に行はれたものと見、ダヤン・ハガンはこの征伐の後、その後始末をして死んだのであるから、その死去は少くとも嘉靖十一二年のこととされる。

ところがここで先生が利用された漢訳蒙古源流の文であるが、これを蒙文本の原文に当つて見ると決してバルス・ボロトの諸子を動員したのではない。即ち先の引文で傍圏を附した部分は、原文では barsubolad jinong köbegün-degen 即ち「自分の子バルスボラト親王（ジノン）に」となつてゐて、(7) 明らかに源流の著者の意味する所はバルス・ボロトが自ら出征したのであつて、従つて嘉靖十年以前のこととなるのである。かく漢訳本に誤られて、先生はダ

ヤン・ハガンはバルス・ボロトの死後も生きてゐたものと考へ、既に隠居して後見のやうな位置にあつたものかと想像してをられる。

かく和田先生はダヤン・ハガンの在位を約五十年間に限つておいて、その間の成化二十三年に報ぜられた小王子の死を、軽く触れた伝聞の報告で、之を直に事実とは認め難いとし、弘治元年に明廷に書を遺つて大元大可汗と称した小王子も、明実録にこれを伯顔猛可王と同一人と記す箇所がないことからやはりバト・モンケ・ダヤン・ハガンであつたものと見、この事業については主として蒙古源流に基き、明の記録を引照しつつ(1)亦思馬因の撃滅と永謝布(Yöngsiyebü)併合、(2)瓦剌の撃攘、(3)火篩(Qoosai)の討伐と土默特蒙郭勒津(Tümed mongroljin)併合、(4)右翼併合、(5)兀良哈(Uriyangqan)討滅の五つの事業に分つて説かれ、次に諸子の分封を述べて左右翼六万戸の制に及び、この雄篇を結んでをられる。

この論文は蒙古史料、ことに蒙古源流の伝へる年代に利用価値があることを始めて発見し、巧みに明側史料と対応させた点において大きな意義があるが、半面その弱点は成化二十三年に報ぜられた小王子の死を否認しなければならなかつたことと、ダヤン・ハガンが晩年隠居して第三子に位を奪はれたとしたことである。但し後者は漢訳本蒙古源流に誤られたに過ぎず、蒙文原本に依ればさやうな無理な推定を下す必要はなかつたのであることは既に述べた。

この和田先生の新説に対し、明史料、主として明実録に拠つて異論を唱へたのが萩原淳平氏である。萩原氏は昭和三十四年三月、東洋史研究十七巻四号に「小王子に関する一考察」を発表したが、これは直接にはダヤン・ハガ

ン問題に触れず、成化・弘治年間における小王子の活躍とその亦思馬因及びオイラトとの関係を明実録に依つて究明したものであり、傍ら和田説（但し「内蒙古諸部落の起源」の）を批判したものである。蓋しこの時には「東亜史研究(蒙古篇)」は未だ萩原氏の目に触れてゐなかつたものであらうが、その世に出るに及んで萩原氏は今度は明史料に基く蒙古史料、殊に蒙古源流批判を行ひ、「ダヤン・カンの研究」を昭和三十八年十月刊の「明代満蒙史研究」に収めて発表した。これは全篇和田説の反論として構成されてゐるが、要点を述べれば、先づ和田説の弘治の小王子は伯顔猛可王に非ずとするのを駁して、弘治元年に大元大可汗と称して書を送つて来た小王子が伯顔猛可王に他ならぬことを精細に論証し、以下弘治三・四年、同十一年の小王子も同人であつたことを示し、これから延いて弘治元年の前年なる成化二十三年の小王子の死も信ずべしとしている。かくして伯顔猛可王がダヤン・ハガンに他ならぬと考へた上で、その卒年の決定には談遷の国榷を利用してゐる。即ち明武宗実録巻一六四、正徳十三年七月丙午の条に

虜寇靖邊営、殺傷官軍……。

とあるのが、国榷巻五〇、同日の条には

阿爾倫寇靖邊営。

となつているのを証拠として、阿爾倫はダヤン・ハガンの生時に死んだその長子トロ・ボロトであるからこの時ダヤン・ハガンは未だ在世中であるとし、一方明世宗実録巻六、正徳十六年十一月己未の条の

虜犯大同中路。総兵杭雄等督兵拒之。

が、国榷巻五二、同日の条には

卜赤犯大同中路。総兵杭雄拒却之。

に作られてゐるからこの時は既にボディ・アラク・ハガン（Bodi alar qaγan）の時代であると見て、ダヤン・ハガンの死を正徳十三年から同十六年に至る間に置く。そしてその傍証として明世宗実録巻一六、嘉靖元年七月辛未の条の

兵部以套虜数入寇、議處延・寧二鎮失事官。且今秋高、虜情叵測、備之宜豫。請先集二鎮精鋭列守、伏虜所入要路、仍行所部、急収保設坑塹、習火器。令陝西會兵佐之、而以甘粛兵為應援。詔如所議行。

に当る国榷巻五二、同日の条が

(a)套虜数入寇、指揮楊洪等敗没。議譴延綏・寧夏失事者、仍趣陝西・甘粛援兵。(b)兵部尚書彭澤自請行邊。止之。(c)初小王子死、有三子。長阿爾倫、次阿着、次滿官嗔。阿爾倫前死、二子、長卜赤、次乜明、皆幼。阿着稱小王子、未幾死。立卜赤、稱亦克罕、猶言可汗也。然亦稱小王子如故云。

となつてゐることを挙げ、「明朝が套虜の侵入に苦しみ、その対策のために兵部尚書以下が集合して盛んに議論したことは事実と認められる。その対策協議中に敵状を示すためにこれまで入つた情報として『初小王子死』以下のことが報告され、それが実録では除かれ、国榷にのみ残つたもので、ことさら後につけ加へたものでないと見てよからう。」と説く。即ち萩原氏は国榷をもつて明実録の所拠の文書類の内容をよりよく保存したものと見てゐるのであるが、これは疑はしい。言ふまでもなく国榷は実録の一異本ではなく、まして実録以上の史料的価値を有する

ものでもない。談遷が国榷を撰したのは清の順治十年前後であるが、その巻頭の義例に「實録外、野史家状、汗牛充棟、不勝数矣。往往甲丞乙渭、左軒右輊。若事鮮全瑜、人寡完璧、其何途之從。曰、人與書當参観也。其人而賢、書多可採。否則間徴一二、毋或輕徇。」また「徧攷羣籍、歸本于實録。」等の語があつて、その編輯方針が明実録に本づいてこれに野史類の記載を附加するに在つたことを明言してゐる。そこで先に引いた国榷の文を按ずると、最初の(a)の部分は全く実録の要約に過ぎず、これに楊洪の事を附加したものであることが判明する。次の(b)の彭沢の事は恐らく家伝・行状の類からでも採られたもので、最後の(c)は萩原氏も認めてゐる如く葉向高の四夷考と全く同文であるから、恐らく同書から引いたものであらう。[8] 異なる所はただ葉氏が正徳十六年の条下、嘉靖元年の前にこれを記すのを、談氏は嘉靖元年に係けてゐることに過ぎない。さすれば国榷に正徳十三年の虜を阿爾倫、十六年の虜を卜赤と記したのも、別に実録以外に典拠があつたわけではなく、唯四夷考の文に従つてこの頃可汗の交替があつたものと考へて実録の文を書き改めたに過ぎまい。して見ればこれは決定的な証拠とするわけには行かない。萩原氏は続いて当時の入寇の情況、動員した兵数の変化から判断してダヤン・ハガンの死を正徳十四年の前半か、同十五年の後半かであらうと考へる。これは甚だ疑問の多い方法であるが、ともかく萩原氏の説では、ダヤン・ハガンの在位は三十二三年間であつたことになる。[9]

かくダヤン・ハガンの年代を定めた結果、亦思馬因の撃破はその先代の小王子の世であるからダヤン・ハガンの事業とはし難いとし、明実録に拠つて亦思馬因とダヤン・ハガンは協力関係にあつたと説く。次にオイラト撃攘については、「小王子に関する一考察」での論を繰り返して、やはり少くとも弘治四五年までは親近性をもつたと

し、弘治六年から九年にかけて行はれたと和田先生の説かれたオイラト征伐については当時の哈密をめぐる情勢から判断して、無かつたとは断言しないけれども、無かつたとしてもよいと考へる。最後にウリヤンハン討滅については、これは嘉靖年間の事であるから正徳の末近く死んだダヤン・ハガンとは相渉らないものとし、結局右翼鎮圧のみがダヤン・ハガンの功績であつたものと見る。この後萩原氏は「ダヤン・カンの系譜と蒙古社会」と題する一章を設けて、小王子が元裔であると同時にオイラトの血をも承けてゐたものとし、最後に蒙古史料批判の必要を説いて全篇を終つてゐる。

思ふに成化二十三年に或る小王子が死し、翌弘治元年に大元大可汗と称して明に書を通じた新小王子が伯顔猛可王であることは、既に原田先生が論ぜられたことであるが、前小王子が果して四夷考・吾学編・名山蔵の言ふ如く伯顔猛可王の兄把禿猛可王であつたか否かは実録によつては決定出来ない。この点萩原氏はやや簡単に、成化年間の小王子をバト・ムンゲと呼んでいるが、この線に沿つて敷衍したのが佐藤長氏である。

佐藤氏は昭和四〇年七月の史林八巻四号に「ダヤンカーンにおける史実と伝承」を書き、蒙古史料、ここでも蒙古源流の所伝に操作を加へて明史料の所伝に合致せしめようと試みた。これは佐藤氏も自ら言ふ如く和田先生及び萩原氏の説に刺激されて両者の調停を志したもので、和田説からは源流の伝へるマンドグルン・ハガンの治世の天順七年癸未より成化三年丁亥に至ると云ふのが、実は十干の係け誤りで成化十一年乙未より十五年己亥が正しいとするのを採り、次のボルフ親王が立つたのをアルタン・トブチに依つて同じく成化十五年とし、その卒年として源流に伝へられる成化六年庚寅をやはり和田説に従つて十二年繰下げて成化十八年壬寅と訂正し、ボルフ親王の次に

は四夷考等に拠つてバト・モンケが立つたとしてその治世を成化十八年から明実録に小王子が死んだと伝へる成化二十三年に至るとし、バト・モンケの次にダヤン・ハガンが即位したとしてこれを萩原説に従つて弟のバヤン・モンケなりと考へる。そしてダヤン・ハガンの卒年については、源流の伝へる嘉靖二十二年癸卯を十二支二廻り、即ち二十四年繰上げて正徳十四年己卯とし、これが国権に基いて萩原氏の立てた説、正徳十四年の前半又は同十五年の後半に一致するとする。ダヤン・ハガンの死後バルス・ボロトが簒立したことは和田説に従ひながら、次のボディ・アラク・ハガンの即位の年代は万暦武功録の所伝を採用して正徳十六年辛巳とする。この立論は、蒙古史料の伝へる干支を、それ等の根拠を究めようともせずに、本来十二支のみのものであつたと前提して、同様に薄弱な論拠から明史料より導き出された仮説に強引に一致させ、それで足りない所は明の野史の類に過ぎず信憑性の不明な四夷考・武功録等の所伝を無批判に採り入れて組み立てたものであつていささか安易に過ぎる。就中この説の最大の弱点と言ふべきは、バト・モンケ、バヤン・モンケの兄弟関係についてであつて、蒙古史料には常にバト・モンケをダヤン・ハガンと呼び、その弟にバヤン・モンケがあつたことは全く知られていないことを自ら認めながら、猶も源流の満漢訳本の「戊子の年、ボルフ親王は二十九歳でバヤン・モンケを生んだ」といふ誤謬を証拠として採用し、バヤン・モンケが成化四年戊子の生れとすれば成化二十三年には十九歳であり、恰も天順八年生れで成化十八年に十九歳で即位したと佐藤氏の考へるバト・モンケと同じ年齢であつたことになるとし、これが兄弟が混同されて一人となつた原因であるとする。但しこれは氏の誤算で、戊子生れならば成化二十三年丁未には十九歳でなく二十歳であつた勘定となることを注意したい。何れにせよボルフ親王とダヤン・ハガンの間にもう一代の可汗が脱

落してゐるとする佐藤説には、蒙古・明雙方の史料に積極的な証拠が求め得られないことを忘れてはならぬ。

佐藤氏は最後にウリヤンハン征伐に触れ、これをダヤン・ハガンの事業ではなくボディ・アラク・ハガンの功績であるとして萩原説に従ひ、証として既に引いた源流満漢訳本の「バルスボラト親王の子に信を致し」を挙げて同人の死後の事実とし、蒙文原本に依つて「己が子のバルスボロト・ジヌン」と訂正した江氏の訳を誤りと言ふ。これもあまりに恣意的で、満文本及びその重訳なる漢文に従つて蒙文本を改めるのは本末顚倒の誘を免かれまい。とにかく佐藤氏は、氏がボルフ親王の子でダヤン・ハガンの兄なりと主張するバト・モンケ、ダヤン・ハガン、ボディ・アラク・ハガンの三代の事蹟が合揉されて成つたのが蒙古史料の伝へるダヤン・ハガン像であるとし、その中核となつたのはバヤン・モンケ・ダヤン・ハガンであつて、源流の記載は史実と言ふよりは伝承であり、これを以て明側の所伝を律することは出来ないとする。

以上を以て日本に於ける従来の研究成果の概観を終つて、先づ気が附くことが一つある。それは諸家が蒙古史料と称して常に引用するのが殆ど全く蒙古源流一書に限られ、それも蒙文原本よりは漢訳本に頼る傾向の著しいことである。しかも批判の対象とするのは源流の記事の内容といふよりはその伝へる事件の年代であつて、それ等を直ちに明史料と比較して正しいか否かを判定しようとするに急で、源流の所伝の年代、ことに干支が如何なる意味を持つか、それ等が如何にして導き出されたかを究明する地道な努力が極めて軽んじられてゐることを指摘したい。これはどうしても蒙古史料をその文面に則して正確に理解し、その上で信ずべき部分と信ずべからざる部分を弁別して置いて、始めて明史料と対照の手続きを取るのが本当であらう。それに蒙古史料は源流のみではなく、他にも数

多くの年代記が現存してゐて、それ等の所伝は時に源流と大いに異なつてゐるのであるから、蒙古史料を論ずるにはそれ等すべてを対象としなければならない。次にこの事を説明しよう。

（二）各種の蒙文年代記

明末の内蒙古に左右翼それぞれ三万戸の六国が並び立つて各々可汗を戴いてゐたことは和田先生の研究で明かにされ、今日では既に有名な事実である。[10] 先づ今の伊克昭(Yeke juu)盟のオルドス(Ordos)万戸は右翼親王(jinong)の親部であり、その東の帰化城（Köke qota）を中心とする地方はトメト（Tümed）万戸で順義王がこれに拠り、更に東方の今の察哈爾（Čaqar）・蘇尼特（Sönid）両部の地から灤河の流域にかけてはハラチン（Qaračin）万戸の領域であつてこの三国が右翼を形成する。左翼はハラチンの東境に接して老哈河及び大凌河の流域にチャハル（Čaqar）万戸が居り、これが北元可汗の親部であり、その東北方の内ハルハ（Qalqa）万戸は西遼河（Sira mören）の流域から今の哲里木（Jerim）盟の科爾沁（Qorčin）諸旗の牧地を占め、更にその北方の嫩江流域はホルチン（Qorčin）万戸の境域であつた。[11] この中最後のホルチンはチンギス・ハガンの次弟ジョチ・ハサル（Joči qasar）の子孫であるからさて置いて、他の五国の諸王は皆ダヤン・ハガンの後裔である。即ちオルドスはダヤン・ハガンの第三子バルスボラト（Barsubolad）の嫡流で代々親王と称し、トメトはバルスボラトの次子アルタン（Altan）の所封で代々ゲゲン・ハガン（Gegen qa'an）の号を有し、ハラチンは第四子バヤスハル（Bayasqal）の系統でコンドレン・ハガン(Köndölen qa'an)を世襲した。左翼のチャハルは言ふまでもなくダヤン・ハガンの長孫ボディ・

アラク・ハガン（Bodi alar qaγan）の子孫の所領であり、内ハルハはやはりダヤン・ハガンの第五子アルジュボラト（Aljuboladʼ）の後裔で五部（tabun otor）に分れ、その中ジャルート（Jarud）部長が相継いでハガンと称したと言ふ。更に外蒙古に蕃延した外ハルハ（Qalqa）もダヤン・ハガンの子孫で、明末に併立した三可汗、ジャサクト・ハガン（Jasaγtu qaγan）、トシエト・ハガン（Tüsiyetü qaγan）、チェチェン・ハガン（Čečen qaγan）はすべてダヤン・ハガンの季子ゲレサンジャ（Geresanja）の血を引いてゐる。かく明代内蒙古の五国と外蒙古の三可汗は皆ダヤン・ハガンの子孫であつたが、各国にはそれぞれ相当豊富な記録があつたらしい。現在利用出来る蒙文年代記の中明代撰述なることの確かなのは、オルドスのチンギス・ハガンの霊廟、所謂八白室（Naiman čaγan ger）の祭祀の起源を説いたチャガーン・テウケ（Čaγan teüke）のみであるが、[12] 清代に入るとそれ等明代の蒙文記録に基いて多くの年代記が続々と現れた。そうした蒙文年代記はそれぞれの著者の出自を反映してか、内容上相互にかなりの差異があり、これはそのまま明代の各万戸に於ける記録の伝統を保存してゐるものと思はれる。次に各国に分つてその系統の年代記を列挙して見よう。

先づオルドスの年代記としては、ウーシン（Üγüsin）部長サガン・セチェン皇太子（Saγang sečen qong tayiji）が康熙元年に撰した(1)「帝王根源宝貝史綱（Qad-un ündüsün-ü Erdeni-yin tobči）」即ち蒙古源流がある。これは現在の所、編述年代の明かな年代記としては最も古く、その特徴は全書に鏤められた夥しい干支紀年である。

次にトメトの年代記と覚しいのは国師ロブサンダンジン（Blo bzang bstan ʼdzin kemegdekü guusi）の著(2)「黄金史綱（Altan tobči kemegdekü šastir）」即ちアルタン・トブチである。[13] 成立の年代は不明であるが、内容から

見て大体順治十二年頃かと言はれ、[14] 蒙古源流と相前後する時代のものである。同名の国師は康熙六年、帰化城の喇嘛ガワンロブサン（Ngag dbang blo bzang）の依嘱を受けて五台山の案内記「文殊志（Uta-yin tabun aγulan-u orosil süsügten-ü čikin čimeg orosiba）」を著はしてをり、[15] やはり帰化城の人と思はれるが、かく考へればアルタン・トブチに、一時帰化城に占拠したチャハルのリンダン・ハガン（Lingdan qaγan）の長々しい称号を完全に伝へてゐることも、トメトの東隣のハラチンが清の太宗に投帰した始末を詳叙してゐることも容易に合点が行く。その伝へる紀年も記事も蒙古源流と異り、全く別の史料に基いてゐることが察せられる。

このアルタン・トブチに基いて簡略にしたのが無名氏撰の(3)「帝王根源要略黄金史綱（Qad-un ündüsün-ü Qu-riyangγui altan tobči）」即ち略本アルタン・トブチである。これが普通にアルタン・トブチ又は黄金史と呼ばれてゐるもので、既に多くの刊本がある。[16] その史料的価値はロブサンダンジンのアルタン・トブチに及ばないことは勿論である。

ハラチン系の年代記は、雍正十三年に鑲紅旗蒙古都統羅密（Lomi）の撰した(4) Mongγol borjigid oboγ-un teüke がある。ロミはハラチンのバヤスハル・コンドレン・ハガンの八世の孫で正藍旗蒙古左参領第十三佐領の人、[17] 初め蔭生となり、[18] 康熙・雍正の交に一時理藩院郎中に任ぜられたらしく、雍正二年十二月直隷守道を改めて置かれた直隷布政使司の初代の布政使と為つたが、[19] 翌雍正三年八月北京に調還せられた。[20] 雍正五年七月に至つて羅密は鑲白旗蒙古副都統に任ぜられたが雍正十年十月に至り事に縁り革職された。[21] [22] 雍正十三年四月再び鑲紅旗蒙古副都統に調せられ、[23] 同五月都統に陞任した。[24] 乾隆二年二月他の任に調せられたらしいが間もなく同六月再び鑲白旗蒙古都統に任

ぜられ、乾隆三年十一月に退休した。[25] 卒年は未詳である。その撰する所の年代記には雍正十三年八月朔の序があり、元来満洲語を以て書かれたものであるが、今見得るのは道光十九年三月十五日附の蒙古訳[26]と、民国二十三年に張爾田が刊行した「蒙古世系譜」と題する漢訳本とである。その記事の内容は約ゝアルタン・トブチと一致するが、紀年の方は蒙古源流に近い。これは右翼三国の内のハラチンの文化的位置から見て興味深い。

さて左翼の年代記はといへば、チャハルには⑸ Ganggа-yin urusqal がある。[27] これは雍正三年烏珠穆沁（Üjümučin）右翼旗札薩克和碩車臣親王察罕巴拜（Čaran babai）の孫ゴンボジャブ（Gomboǰab）の撰する所であるが、ウジュムチンはボディ・アラク・ハガンの第三子オンゴン・ドラル（Ongгon dural）の所封であつて即ちチャハルの別部であり、ダヤン・ハガンから数へて著者は九世の孫となり、理藩院の唐古忒学の教習であつて漢満蒙蔵の語に通じてゐたといはれる。その所記は甚だ簡単であるが紀年・内容ともに独自のものがある。

内ハルハの年代記には二つある。一つは⑹「金輪千輻（Altan kürdün mingгan kegesütü）」でジャルート部のシレゲト国師ダルマ（Siregetü guusi dharma）が乾隆四年に撰したものであり、[28] 他は⑺「ボロル・エリケ（Bolor erike）」でバーリン部のラシプンスク（Rasipungsuг）が乾隆四十年に撰したものである。[29] ラシプンスクは巴林（Baгarin）右翼旗札薩克多羅郡王色布騰（Sebten）の五世の孫でダヤン・ハガンはその十一世の祖に当る。両書とも紀年はガンガイン・ウルスハルと一致し、記事の内容も共通した部分が多い。これは内ハルハが明代チャハル可汗の被管であつた事情を考へれば了解されよう。

最後に外ハルハの史書としては、最も古いのがシャンバ・エルケ・ダイチン（Byamba erke daγičing）、即ち喀

爾喀の信順厄爾克戴青諾顔善巴が康熙十六年に著はした(8)「アサラクチ・ネレト・テウケ（Asaraγči neretü teüke）」である。[30] シャンバ の部は後に雍正九年に至つて賽音諾顔（Sayin noyan）部として独立したが、その七世の祖がダヤン・ハガンである。この書はアルタン・トブチと共通の史料を利用したらしく、紀年・内容ともに甚だ後者に近い。これはトメトと外ハルハとの地理・政治・文化上の親近関係から見て自然と思はれる。

(9)「ジャラグスン・フリム（J̌alaγus-un qurim）」[31]は前記アサラクチから借用した部分があり、且つその記す系譜が外ハルハに詳しい所から見てやはりこの地方の編述であらう。撰人も成立年次も記されてゐないが、系譜中の人物が康熙四十年頃在世の人々を以て終つてゐる所から、やはり同年頃の著作と思はれる。紀年・内容は共にオルドスの蒙古源流に近い。このジャラグスン・フリムに相当多量の書き足しが行はれたのがやはり無名氏撰の(10)「シラ・トグジ(Sira tuγuji)」である。[32] 増補部分には外ハルハの系譜に関する記述が多いから、やはり外ハルハの年代記であらう。注意すべきことは、蒙古源流の奥書にその所拠の七種の史料の第七に挙げた Erten-ü mongγol-un qad-un ündüsün-ü yeke sir-a tuγuji と名は同じいが全く別書であることである。

以上十種類の外にも蒙文年代記は存在するが、何れも嘉慶以後の成立で史料的価値は低いので置いて論じない。さて以上に説いた所で明らかになつたやうに、蒙文年代記には紀年でも記事の内容でもそれぞれ三つの系統があるやうで、蒙古源流、アルタン・トブチ、ガンガイン・ウルスハルがそれぞれの系統を代表する。今仮にこれ等をオルドス系、トメト系、チャハル系と名づければ、ハラチン・外ハルハの史書はアサラクチの如く全くトメト系に属するものもあり、蒙古世系譜のやうにトメト、オルドス両系の影響を受けたものもあり、ジャラグスン・フリムの

やうに全くオルドス系の所伝に従ふものもある一方、左翼の内ハルハの年代記はこれ等右翼系の伝承とは没交渉にチャハル系に属してゐることが看取される。それではこれ等三系統の所伝とは如何なるものか、先づ紀年について論じよう。

（以下次号）　（東洋文庫研究員）

註

（1）皇朝藩部要略　巻一。

（2）欽定外藩蒙古回部王公表伝　巻四五・五三・六一・六九。

（3）江実訳註「蒙古源流」東京　昭和十五年　満文原文八二頁。

（4）蒙文蒙古源流の諸本は次の略号で呼ぶ。括弧内は本文に引いた箇所の頁数である。

ウルガ本＝Erich Haenisch, Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen). Berlin, 1955. (61v)

殿本＝Erich Haenisch, Der Kienlung-Druck des mongolischen Geschichtswerkes Erdeni yin Tobci von Sagang Secen. Wiesbaden, 1959. (p. 159)

シュミット本＝Isaac Jacob Schmidt, Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Ssanang Ssetsen Chungtaidschi der Ordus. St. Petersburg-Leipzig, 1829. (p. 178)

オルドス本＝Rev. Antoine Mostaert & Francis Woodman Cleaves, Erdeni-yin Tobči, Mongolian Chronicle by Sayang Sečen. Cambridge, 1956. 4 vols. (MS. A: p. 168; MS. B: p. 149; MS. C: p. 166)

（5）この事は江氏が既に注意してゐる。同氏前掲書、註二五頁に「bolhū jinung は bayan mungke 自身の称号であるから、『bolhū jinung が二十九歳の時に bayan mungke を産みぬ』ということの満文は極めておかしい。」とある。

（6）沈曾植「蒙古源流箋証」巻六。

（7）ウルガ本 66r. 殿本 p. 173. シュミット本 p. 194. オルドスA本 p. 182. B本 p. 161. C本 p. 178. なほこのことは江実氏が既に指摘してゐる。同氏前掲書、註二七頁。

（8）但し萩原氏の言ふ所とは異なり、辺政考・万暦武功録の文はこれと著しく違つてゐる。明代満蒙史研究　二四三

頁。

(9) 因みに秋原氏は「内蒙古諸部落の起源」を誤読して、和田説ではダヤン・ハガンの死は嘉靖二十三年頃、在位は従つて六十五年となつてゐるやうに書いてゐるが、実は原文では「嘉靖二三年」で、二年または三年の意であり、従つて在位は四十余年となつてゐたことを注意しておく。

(10) 「東亜史研究(蒙古篇)」五一一頁。

(11) これは嘉靖二十六年のチャハル部の東遷から天啓末年までの形勢である。詳しくは目下準備中の清初の蒙古経略を扱つた論文で説く。

(12) Walther Heissig, Die Familien- und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen, I., 16.—18. Jahrhundert. Wiesbaden, 1959. pp. 17—26; Facsimilia, pp. 1—25.

(13) Rev. Antoine Mostaert & Francis Woodman Cleaves (ed.), Altan Tobči, A Brief History of the Mongols by bLo. bzań. bsTan. 'jin. Cambridge, 1952.

(14) Heissig, *op. cit.*, pp. 50—75.

(15) Heissig, *op. cit.*, *loc. cit.*,; Walther Heissig, Die Pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache, Wiesbaden, 1954. pp. 12—15.

(16) Heissig, Geschichtsschreibung, pp. 75—79.

刊本には次の諸版がある。

(1) Galsan Gomboiev, Altan Tobchi, Mongol'skaia Letopis', v podlinnom tekste i perevode, s prilozheniiem kalmytskago teksta Istorii Ubashi-Khuntaidzhiia i iego voiny s oiratami. Trudy Vostochnago Otdeleniia Imperatorskago Arkheologicheskago Obshchestva, Chast' shestaia, Sankt-peterburg, 1858.

(2) Činggis qaγan-u čadig. Peking, 1925.

(3) Boγda činggis qaγan-u čidig. Peking, 1927.

(4) 蒙文蒙古史記 Mongol Chronicle Činggis Qagan u čidig including Altan Tobči. No dates.

(5) 小林高四郎「アルタン・トプチ(蒙古年代記)」外務省調査部第三課、昭和十四年。

(6) 藤岡勝二「羅馬字転写 日本語対訳 喀喇沁本蒙古源流」東京、文江堂、昭和十五年。

(7) Charles Bawden, The Mongol Chronicle Altan Tobči. Wiesbaden, 1955.

(17) 八旗通志初集巻一一一、旗分一一一、八旗佐領。同条に拠れば羅密は兄索諾穆(Sonom)の死後この佐領を管理したが「人及ばざるに因り」辞退せられたとあり、その年代を明かにしない。

(18) 雍正籌輔通志巻六〇、布政使。
(19) 清世宗実録巻一二七、雍正一二年十一月己卯。
(20) 同書巻一三五、雍正一三年八月戊子。
(21) 同書巻一五九、雍正五年七月己卯。
(22) 同書巻一一二四、雍正十年十月壬戌。
(23) 八旗通志初集巻一一〇、八旗大臣年表四、八旗蒙古管旗大臣年表下。
(24) 清世宗実録巻一五六、雍正十三年五月癸卯。
(25) 欽定八旗通志巻一三五、八旗大臣年表十六、八旗都統年表六、蒙古八旗三。
(26) Walther Heissig & Charles R. Bawden (ed.), Mongγol Borǰigid Oboγ-un Teüke von Lomi (1732). Wiesbaden, 1957.
(27) Gombodzhab, Ganga-iin Uruskhal (Istoriia zolotogo rode vladyki Chingisa.—Sochineniie pod nazvaniiem ≪Techeniie Ganga≫). Moskva, 1960.
(28) Walther Heissig (ed.), Altan Kürdün Mingγan Gegesütü Bičig, Eine mongolische Chronik von Siregetü Guosi Dharma (1739). Kopenhagen, 1958.
(29) Rev. Antoine Mostaert & Francis Woodman Cleaves (ed.), Bolor Erike, Mongolian Chronicle by Rasipungsuγ. Cambridge, 1959. 5 vols.
(30) Byamba, Asaraγči neretü-yin teüke. Ulaanbaatar, 1960.
(31) Heissig, Geschichtsschreibung, Facsimilia, pp. 86—111.
(32) N.P. Shastina (ed.), Shara Tudzhi, Mongol'skaia letopis' xvii veka. Moskva-Leningrad, 1957.